

卒業研究発表会抄録

学籍番号 01M2414 氏名 原 悠子

1. 研究テーマ

慢性呼吸不全患者の在宅呼吸リハビリテーションと外出状況について
～呼吸リハビリテーションの捉え方を考える～

2. 研究目的

2週間の療養日誌を用い、呼吸リハの実施率と外出状況をみることで、慢性呼吸不全患者が、どれだけ活動的な生活を行っているか、詳細を明らかにすることで、生活に根付いた呼吸リハの内容と捉え方を考える。

3. 研究対象と方法

1) 対象

市立秋田総合病院呼吸リハ科外来受診中の在宅患者 20 例（男性 18 例、女性 2 例、平均年齢は 71.45 ± 6.41 歳、基礎疾患は COPD 18 例、気管支拡張症 1 例、脊椎カリエス後遺症 1 例、呼吸リハ継続年数 42.95 ± 24.03 ヶ月）であった。今回対象となった慢性呼吸不全患者は全例「家庭で行う呼吸リハビリ」を指導され、定期的な受診は Dr と PT によるフォローであった。

2) 方法

- ①情報収集（個人カルテより）：体格、呼吸機能、胸郭可動性、呼吸・四肢筋力および運動耐容能の身体的情報のほか、HRQOL（CRQ）、精神的情報（HAD 尺度）を収集した。
- ②2週間の療養日誌により、呼吸方法・筋力トレーニング・歩行練習などの在宅呼吸リハ実施状況と外出目的・時間・距離・手段などの外出状況について調査した。
- ③データ分析として、カルテや療養日誌から得られた情報を単純集計した。また、体格、呼吸機能、運動耐容能のデータをもとに、BODE Index を算出し、在宅呼吸リハ実施率（実施日数/2WS）、外出頻度（外出回数/2WS）についても算出した。さらに、項目間の相関関係を調べた。

4. 結果

- 1) 在宅呼吸リハ実施状況：平均実施率は $66.96 \pm 20.67\%$ であった。
- 2) 外出状況：外出頻度は 0.98 ± 0.53 回/日であった。外出目的は、買い物 22.6%、通院 20.1%、仕事 13.5%、園芸 11.3%、外食 5.11%、歩行練習 2.55% であり、外出先はこれに準じていた。外出手段は、自動車 68.6%、歩行 32.8%、であり、外出人数は、1 人が 65.93% であった。
- 3) 項目間相関：呼吸リハ実施率は継続年数と、外出頻度は BODE、6MWD と、それぞれ有意水準 5% の相関がみられた。また、外出頻度は DLco と有意水準 1% の相関がみられた。

5. 考察とまとめ

1) 外出状況に関して

外出頻度・目的は一般高齢者と大差なく、本対象の外出状況は一般的な活動レベルであったと考える。しかし、内容は個人によりバラツキがあった。また、外出頻度は、BODE、DLco と相関していた。BODE、DLco はどちらも呼吸リハを行ううえで重要な項目である。今回はこの 2 つの値が良いほど、外出しているという結果を得た。これらから、呼吸リハを行う前に活動状況を知ることが必要であり、また、息切れが生じない外出をさせることが必要であると考えた。よって、呼吸リハとして、より個人に即したアプローチの重要性が示唆された。

2) 呼吸リハの捉え方に関して

呼吸リハ実施率と継続年数は相関しており、実施率が高い人は、比較的継続年数が短いいわゆる呼吸リハの導入段階であった。一方、継続年数が長い人の実施率が低かったのは、呼吸リハを意識しないで行っているためであると考えた。また、同じような継続年数、外出状況の人でも、呼吸リハをきちんと行っていると答えた人と、導入時期に指導された呼吸リハは行っていないと答えた人がいた。このように生活に根付いた呼吸リハを考えた際、個人の意識の差が強く影響していると考えた。呼吸リハの最終目的は、患者が生活のなかで活用できることであり、目的ではなく、単なる手段なのである。これらのことから、呼吸リハは、生活に溶け込んだ形で存在すべきであると考えた。

まとめ

以上のことから、生活に根付いた呼吸リハを行うためには、外出状況を詳細に把握し、個人の意識にも着目したアプローチが重要だと考えた。